

## 吉野作造のドイツ留学（一）

今野 元

吉野作造（明治一一年―昭和八年）は、「大正デモクラシー」の代表的論客として広く知られた人物であるが、その実像はいまだ多くの謎に包まれている。吉野作造研究の開拓者である三谷太一郎は、かつてこう指摘していた。「吉野の民本主義論は、彼の見聞した同時代のヨーロッパおよびアメリカの研究を直接の前提としていた。ここに吉野の民本主義論の形成における欧米現代史研究の重要な寄与、いいかえれば吉野の政治学に対する彼の歴史学の重要な寄与を看取することができる。」<sup>1</sup>この指摘は確かに当を得たものだが、それなら我々は、「彼の見聞した同時代のヨーロッパおよびアメリカ」とはどのようなものであったのかを、具体的に知らなければならぬだろう。ところが吉野の欧米体験については、これまで政治史研究のメスが入れられてこなかった。<sup>2</sup>とりわけ吉野が欧米留学の大半の時間をドイツで過ごしたという点に、大半の吉野研究はほとんど関心を払っていない。吉野本人も、晩年に自分の洋行について語るときには、ドイツ体験に余り触れながら面があつたようである。<sup>3</sup>日本政治史研究、とりわけ日独関係史研究にとって重要と思われるのは、第一次世界戦争であれば一方的に、ドイツを世界平和の敵として戯画化し、非難攻撃の対象にした吉野が、そもそもどうしてドイツに留学していたのか、彼はドイツで一体何を学び、何を見てきたのかである。この点を解明しようというのが、本研究の趣旨である。

頻繁に引用する史料は、以下の略号を用いて文中で典拠を示す（数字は頁数）。頁数のみは『吉野作造選集13 日記一』（岩波書店、平成八年）／「滯德日記」＝吉野作造「滯德日記」、『新人』第一二卷第三号（明治四四年）、二七七一—二八六頁、第一二卷第四号（明治四四年）、三八一—三八八頁／「獨逸見聞録1」＝吉野作造「獨逸見聞録」、『新女界』第三卷第三号、一〇—一九頁／「獨逸見聞録2」＝吉野作造「獨逸見聞録」、『新女界』第三卷第四号、二二—二八頁

### 一・ドイツ留学への道

吉野作造の生育環境には、ドイツに関するものは見出されない。少年吉野の世界に登場する外国は、いずれもドイツとは異なる国々である。吉野の故郷である宮城県北部（仙北）は、明治初年からロシア正教会が大規模に進出した地域で、古川、仙台、中新田、清水、石巻、金成、涌谷、気仙沼など、吉野の近隣に次々と教会堂が建設されていた。ただ吉野は、そうした身近な潮流には背を向けるかのように、ロシア系ではなくアメリカ系のキリスト教に帰依することになる。吉野は、宮城県尋常中学校、第二高等学校に通学した仙台で、バイブル・クラスに通ってアメリカ人女教師アンネ・S・ブゼル嬢に習い、仙台浸礼教会（バプティスト教会）で受洗している。いずれにしてもドイツに関連する吉野の逸話は、古川でも仙台でも伝わっていない。あるいは第二高等学校法科で、吉野がドイツ法の手ほどきを受けていたのかもしれないが、これも確認されているわけではない。

吉野作造とドイツとの本格的な出会いは、東京帝国大学法科大学においてだったものと推測される。しばしば引用される吉野の回顧談に、次のようなものがある。「二年生のとき一木喜徳郎先生の國法學講義に心酔し、一日大に勇を鼓して（當時私は格別内気で臆病であつた）先生を九段上の私邸に訪うて教を乞ふたことがある。遇つては下すつたが、君は獨逸語が達者に讀めるか、でないと話にならぬと云つた風の簡単な問答に辟易して這々の體で引き退り、迂つかり教授問などをするものではないと悔みたのであつた。斯んなわけで、どうしても學問が我々の活きた魂に迫つて來ない。夫れからどう云ふものか私は早くから政治學に興味を有つてゐたと見え、一日こつそり上級のその講義を偷み聞きして

見た。講師は木場貞長氏、駄洒落まじりに一冊の洋書を机上に開いて政治は術なりや否やとか何とか述べて居られた。その時は何とも気がつかなくつたが今考へるとブルンチュリーの紹介であつたらしい。之で以て見ても、當時の最高學府の青年が近代政治の理解を全然缺いて居つたことに何の不思議もないだらう。／＼私自身の眼を此方面で大に開いて呉れた第一の恩人は小野塚教授である。同博士は三十四年歐洲の留學から歸られ、私の二年生のとき私共にその最初の政治學の講義を授けられた。この講義で私の受けた最も深い印象は、先生が政治を爲政階級の術と視ず、直に之を國民生活の肝要なる一方面的活動とせられたことである。先生は盛に衆民主義といふ言葉を使はれた（因に云ふ先生はデモクラシーを衆民主義と譯されたのである）斯なことは現代の人達には何の不思議もないことだらうが、實は斯程までに專制的政治思想があつた頃天下を横行して居たのである。憲法布かれてやつと十年にしかならないのだから、考へて見ればまた怪むに足らぬことも知れぬ。」<sup>4</sup> ここには、吉野のドイツ学との出会いの一つが語られている。まず吉野は一木喜徳郎の国法学講義に心酔したが、私邸での問答でドイツ語の読解能力を問われ、恐縮して引き下がってしまった。次いで吉野は、ブルンチュリーを種本にしたらしい木場貞長の政治学講義に潜入し、「政治を爲政階級の術と視」、「近代政治の理解」にそぐわないものと評価した。これに対して小野塚喜平次の政治学講義は、政治を「國民生活の肝要なる一方面的活動」と見るもので、評価に値すると考えたのである。

ちなみに吉野作造が、ブルンチュリーの政治学を「政治を爲政階級の術と視」るものだとしている点には注意が必要である。吉野は、かねがねブルンチュリーに否定的な印象を懐いていた。吉野には、ブルンチュリーの国法学は、フランス流の社会契約論、イギリス流の議會主義に対して、藩閥政府が担ぎ出した保守的対抗馬、いわば御用学説として認識されていたのである（『滯德日記』278—279）。更に講師の木場貞長が、ブルンチュリーの学説を殊更に「爲政階級の術」にしていた可能性もあるだらう。木場貞長は日本の文学士号に加えて、ドイツで哲学博士号を取得していたものの、常勤教官ではなく文部官僚（当時は普通事務局長）であつて、明治三三年春より小野塚喜平次が明治三四年秋に帰国するまで、非常勤講師として政治学・政治史の講義を担当していたのだつた。当時の法科大学では、官僚や判事が非常勤講

師に任用されることがしばしばあったのである。<sup>5</sup>木場はまだ文学部准講師であった明治一五年、憲法草案作成のため渡欧した伊藤博文に同行した人物で、今日残されている木場の講義録や著作を見れば明らかのように、その問題関心は明らかに富国強兵にあったので、吉野がこれを「爲政階級の術」と表現したというのも、蓋し理由のないことではなかったのである。<sup>7</sup>

木場貞長やブルンチュリとは異なり、吉野作造が賞讃した小野塚喜平次(明治三年―昭和一九年)は、西欧各国における「衆民政」あるいは「憲政」の発展を比較政治的に考察する政治学者であった。小野塚喜平次は越後国の地主の息子で、吉野との年齢差は僅か八歳である。東京の帝国大学法科大学を卒業後、小野塚は明治三十年から三十四年までドイツに留学し、フランス、イギリスにも滞在して帰国した。ハイデルベルク大学では、マックス・ヴェーバーの講義「労働問題と労働運動」を聞いている。<sup>9</sup>帰国した小野塚が行った政治学講義の概要は、その内容を要約して刊行された教科書『政治學大綱』から覗い知ることができる。帰国した小野塚はドイツを「學界ノ先鋒」と呼び、ゲオルク・イエリネットの分類法に依拠しつつ、またブルンチュリ、イマヌエル・カント、オットー・フォン・ギルケなども引用しながら、政治学の全体像をきわめて観念的に説いている。ただそれは、吉野が期待するような「衆民主義」の唱導を含んではいるものの、教壇預言そのものではない体系的、観念的性格を帯びていた。文献一覧には、外にもブルンチュリ、クリストフ・ダールマン、オットー・アンモン、カール・メンガー、ロベルト・フォン・モール、フリードリヒ・ラッツェル、ヴィルヘルム・ロツシャヤー、グスタフ・フォン・シユモラー、ヴェルナー・ゾンバルト、ハインリヒ・フォン・トライチユケ、アドルフ・ヴァーグナーなどのものが挙げられている。非ドイツ語圏の著者も、例えばジェレミー・ベンスラム、ジェイムズ・ブライス、アルバート・ダイシー、ボグダン・アレクサンドロヴィチ・キスチャコーフスキイ、ニコロ・マキアヴェッリ、シャルルルイ・ドゥ・モンテスキュー男爵、ハーバード・スペンサー、トーマス・ウッドロウ・ウィルソンなどが挙げられている。<sup>10</sup>

小野塚喜平次はこのうち吉野作造にとって重要な存在となっていくが、留学前の小野塚は吉野関係を過大評価する

のは適当でない。吉野が東大法学科で、法学教官からも幅広く薫陶を受けていた事実を見据える必要がある。法学からの政治学への分離独立が必要であり進歩であるという戦後政治学界の定言命令を、明治時代の小野塚や吉野にまで投影し、吉野の彼ら法学者との繋がりを見軽視することは適当でない。そもそも小野塚さえ、ハイデルベルク大学では専攻科目を「法学」(Jura)と答えていたのである。また「政治学」担当助教授に過ぎない小野塚は、東大法学科における吉野の「指導教官」ではなく、後年の東大法学部に見られる「門下」や「シューレ」の団結あるいは拘束も、当時はまだ顕著ではなかったのである。法理学演習の担当者として学生吉野に接し、彼の最初の学術出版を支援したのは、穂積陳重(安政三年―大正一五年)であった。穂積はイギリスでバリスターの資格を取ったあと、ベルリン大学で学んで帰国し、日本におけるドイツ法研究の普及に尽力した人物である。穂積は東大法学科の重鎮として、当時学生たちの就職の面倒を見る「口入屋」の役割を果しており、吉野もまた穂積とクライエンテリズムの関係にあった。そもそも卒業時の吉野に「専心學問をしてはどうか」と勧めたのも、のちに逋信省での特別待遇の官職を斡旋したのも、清国渡航前に鳩山和夫、高田早苗を介して早稲田大学への就職を斡旋したのも穂積であった。のちに京都帝国大学の岡田良平総長から吉野が内々に同法科大学行政法助教授の職を打診された際、これに憤激して返事をしないよう吉野に命じたのも穂積である。吉野について敢えて「門下」を語るならば、彼は「小野塚門下」ではなく「穂積門下」だったと言うべきだろう。<sup>13</sup> また就職活動が難航していた吉野に、袁世凱一家の家庭教師という職を斡旋し、後日の採用を匂わせたのは、梅謙次郎(萬延元年―明治四三年)であった。梅はリヨン大学でその博士論文を高く評価されて名声を博したのち、ベルリン大学で学んで帰国していた。<sup>14</sup> ハイデルベルク留学中、梅が赴任先の京城で腸チフスに罹って急死すると、吉野は日記に「真二悼惜ニ堪ヘズ 一日モ早く詳報ノ到ランコトヲ待ツ」と記し、その後も繰り返し痛惜の念を表明している(119・125・126・127)。なお親しい同世代の同僚を見ても、中田薫(法制史学)、上杉慎吉(憲法学)、牧野英一(刑法学)、鳩山秀夫(民法学)などドイツに縁の深い法学者が多い。吉野は彼ら法学者たちと交流し、私信を交換し、著書を献呈し合い、書評を交換、発表し合うなど、のちのちまで密接な関係を有したのだった。なお法学教官だけでない

く、東大法科の経済学教授だった金井延から、吉野が社会主義者鎮圧法について聞いたという逸話もある。更によえば、吉野作造の知的世界は、別に東大法科の内部だけで涵養されたものでもなかった。吉野は東京帝国大学文科大学教授(倫理学)の中島力造から、ロートベルトウスやマルクスについて聞いている(ちなみにバクーニンやクロポトキンについては、文科大学教授(史学)坪井九馬三の法科大学での「政治史」講義で聞いたという)。また早稲田大学教授・浮田和民の自由主義思想にも、吉野は惹きつけられた。穂積八束を始めとする当時の帝大の教授連には、イギリスは選挙法改正で議会の品位が落ちたということ(吉野曰く「出鱈目」)を公言するものが多いなか、吉野は早稲田の浮田に一種の清涼剤を見出したようである。<sup>15)</sup>

政治学者としての吉野作造はドイツ学から出発したが、彼の留学前の仕事には輸入学問的な色彩が強かった。吉野作造は東京帝国大学法科大学政治学科を首席で卒業したが、一学年上の同学科で第四席だった上杉慎吉のようにすぐ助教に就任することができず、とりあえず工科大学嘱託講師を務めつつ、『國家學會雜誌』の編集委員として東大法科との関係を維持することとなった。この時期の吉野の作品として注目されるのが、『ヘーゲルの法律哲学の基礎』である。この論文は穂積の法理学演習での研究成果であり、明治三八年に『法學協會雜誌』に掲載され、翌年単行本として出版されたものである。吉野はここでクーノ・フィッシャーらの先行研究を参考にしつつ、難解なヘーゲル哲学を懸命に紹介した。また「個人主義的機械主義」を排して個人と国家との一体化を説くヘーゲルの「有機体」思想は、日露戦争に熱狂していた学生吉野の心境とも合致するものであった。<sup>16)</sup>更に吉野は明治三九年、『國家學會雜誌』第二〇号第一号に「農業保護政策ト獨逸労働者」なる文章を発表している。これはドイツ「社會民主黨員(?)ノ手ニ成ル穀物輸入税反對論」の抄訳で、やや極論だが日本の輸入米課税論争への参考資料となるとの前書が付されているが、吉野自身の考察はなく、出典や著者名も明かされていない。<sup>17)</sup>このうち清国滞在期間中の現代中国政治論を挟んで、吉野は明治四二年から翌年にかけて、『國家學會雜誌』第二三号第九・一〇・一一・一二号、同第二四号第一・二号に「近世平和運動論」なる長大な文章を発表しているが、これもまた分析なき抄訳であった。底本は「同種ノ著書中出色ノモノ」(吉野)だと

いう、アルフレート・ヘルマン・フリート（一八六四年—一九二二年）の『近代平和運動』であった。<sup>18</sup> 著者はエステルライヒの平和主義者で、国際機関の設置による平和構築を訴え、のち明治四四年にノーベル平和賞を受賞している。<sup>19</sup>

卒業後一年以上経っても就職先の決まらない吉野作造は、とりあえず清国の直隸総督であった袁世凱の長男、袁克定の家庭教師になることにした。三年間に互ったこの清国滞在は、吉野の初めての長期外国滞在である。吉野はこの清国滞在に際して、多くの滞在記を『新人』や『新女界』に投稿しており、外国観察としてはのちのドイツ留学の練習をする形となった。そこでの吉野に顕著なのは、中国の支配者及び日常生活に対する強い違和感である。吉野は清国で見聞きした墮落、腐敗、停滞、不正、暴力、愚昧の数々を、この上なく赤裸々に書き綴り、こう結論付けている。「人類本性の自然的煥發が著しく妨げられて居るが爲めに、支那人には著しく獨立自由の思辯と云ふことが乏しい。獨立自由の思辯が乏しいから従て亦高遠なる理想と云ふものがない。理想がないから當然また進歩と云ふことが無い。大體から云ふと支那には**模倣**はある。併し乍ら進歩は無いと予は斷ずるを憚らない。」<sup>20</sup> こうした吉野の中国観は、いわばヘーゲル『歴史哲学講義』のそれを実証するものであり、そのヘーゲルを援用した丸山眞男のアジア観にも通じるものがある（尤も日本と中国とを峻別した吉野とは異なり、丸山は両者を同類と見ていたが）。こうした吉野の、知的高みから野蛮国を観察する文明国の知識人としての一面は、従来知られてきた中国人・朝鮮人留学生の庇護者としての一面と、必ずしも矛盾するものではない。「我日本帝國にして眞に支那の爲に圖らうとならば科學上道德上の最も普通平凡なる常識を支那人一般に傳ふるに若くは無い。清國政府の爲めに力を致すも必要であらう。吏人の出たる留學生などの爲に心を勞するも必要であらう。併し更に緊要にして又最も有効なのは、自ら清國庶民の中に打ち入り、近世文明の教ふる眞理の光に浴せしめ、彼等をして眞理に依りて事を斷じ事を行ふの人民たらしめる事であると思ふ。」<sup>21</sup> ここに表現されているように、吉野においては中国の現実に対する情容赦ない否定的評価と、これを先進国知識人として助けたいという家父長的な愛情とが、表裏一体の関係にあつたのである。

明治四二年に帰国して東京帝国大学法科大学助教教授に採用された吉野作造は、授業担当のない恵まれた一年を経て、

明治四三年四月一五日に三年三箇月に及ぶ留学へと旅立った。追悼誌『古川餘影』の「略歴」には、「政治史及政治學研究ノ爲メ滿三箇年間獨國英國及米國へ留學ヲ命セラル」という記載がある。<sup>22</sup>「獨國英國及米國」という留学地の選択に当り、吉野が相談したのは、洋行から帰国して比較的間がない小野塚喜平次であった。けれども、吉野の留学地を独英米三国だとする理解は、吉野の留学の実態には合わないものであった。吉野の滞在先はドイツ語圏が大半で、ドイツ帝国で二年二箇月、ハプスブルク帝国（但しハンガリー王冠の地、ベーメン王国なども含む）で三箇月、ルクセンブルク大公国で一日過ごしているの、吉野の洋行は実質的には（ドイツ語圏への留学という意味で、あるいはドイツ帝国で相当部分の時間を過ごしたという意味で）「ドイツ留学」と呼ぶのが相応しい。吉野のイギリス滞在は二箇月余り、アメリカ滞在は僅か十二日間で、いわば「旅行」の域を出るものではなく、これで彼が「英米に留学した」と言うのは全く無理があるだろう。ドイツ語圏以外の活動を挙げるなら、アングロサクソン圏より寧ろ、ナンシー、パリ、ジュネーヴなどフランス語圏での漫遊が半年に及んでいる点を指摘するべきだろう。

吉野作造は洋行に当り、海老名弾正、徳富蘇峰の仲介を受けて、後藤新平男爵（のち子爵、伯爵へ陞爵）（安政四年―昭和四年）に留守家族の生活費の工面を依頼した。後藤新平は、吉野の故郷である陸前古川からも近い（同じ伊達領内の）陸奥国（陸中）水沢の出身で、当初医師として出発した。後藤はドイツに留学し（明治三年―明治五年）、ミュンヘン大学教授マックス・フォン・ペッテンコーファーのもとで医学博士号を取得している。のち台湾総督の兒玉源太郎に見出されて、後藤は台湾総督府民政長官に抜擢され、更に南滿洲鉄道株式会社初代総裁を歴任して、吉野が訪問した当時は第二次桂太郎内閣の通信大臣、貴族院勅撰議員を務めていた。吉野は毎年五百円ずつ、三年間の支援を約束した後藤に恩義を感じていたという。<sup>25</sup>興味深いことに、後藤は吉野が敵視する藩閥勢力側の人間であったばかりでなく、ドイツとの関係においても吉野とは対極的な立場に立つことになる人物であった。第一次世界戦争以降の吉野がドイツを世界平和の敵として厳しく批判したのに対し、後藤は日独友好関係の更なる発展に尽力し、ヴァイマル共和国時代には配下の衆議院議員である星一（明治六年―昭和二年）とともに、インフレや国際的孤立に悩むドイツ学界を資金



的に援助し、ノーベル賞学者フリッツ・ハーバーの来日を実現したのだった。<sup>26</sup>

## 二、ドイツの学問との対決

ドイツ留学中の吉野作造に関して不可解なのは、彼にドイツの（あるいはヨーロッパの）学問と対決するという意欲が余り見られなかったということである。吉野はハイデルベルク大学での学業に消極的で、当初一年間はある予定だったのに、半年で早々に退去を決め、賃貸契約を巡って下宿先と悶着になっている（172）。それ以外の長期滞在地では、ジュネーヴを除いて大学に学籍登録をした形跡すらない。これは吉野の、同僚たちとの大きな違いであろう。美濃部達吉はイエリネックに心酔し、これを日本に輸入することに務め、これが彼の天皇機関説（国家法人説）の基盤となった。またその論敵であり、吉野とも親交のあった上杉愼吉に到っては、イエリネックに私淑する余り自宅に住み込んで薫陶を受け、帰国後もイエリネック夫妻に情感あふれるドイツ語書簡を送っているほか、保養地アーデルスハイムに籠って読書三昧の日々を送り、それが崇つて一時は神経衰弱の症状が出るほどであった。<sup>28</sup>だが、吉野の留学は美濃部や上杉とは大いに異なるものであった。

吉野作造もハイデルベルク大学では当初イエリネックを目当てにしていたが、結局彼はこの人物と真剣には向き合わず、またそもそも彼にはそのための十分な時間もなかった。一九一〇年十一月六日、すでに冬学期開始から一箇月ほど経ってから、吉野はイエリネックをブンゼン通の自宅に訪ねたが、予約なしで訪問したのだろうか、先客がいたためほとんど話ができなかった（143—144）。吉野はすでに同年六月にはハイデルベルク入りしていたにも拘らず、イエリネックと会ったのはこのときが初めてだったようである。一月一日、吉野はイエリネックの講義「近代国家の政治」に出席し始めたが、吉野が南ドイツを漫遊しているうちにすでに冬学期が進行していたので、この日の授業はもう五回目、四回目までの分は友人フリッツ・ハーネのノート（？）を借りて臨んだ（144—145）。吉野の日記には、一月二五日（金）、一月二六日（土）、二月二日（金）、二月三日（土）、二月一〇日（土）、二月一七

日(土)にイエリネックの講義に出た形跡があり、週二回の授業のうち途中から金曜日を休むようになったことが分かる。吉野はイエリネックの講義の内容にはほとんど触れていないが、イギリス内閣の起源論の説明が興味深い、選挙法の説明は分かり切ったことで興味を持っていないなど、若干の感想を述べている(149・153)。年末年始の休業に入った二月二日、吉野はイエリネック夫妻から翌年一月一日ハイデルベルク郊外ノイエンハイムのホテル・シフで開催される晩餐会・舞踏会に招待されたが、ヴェストファーレンの友人を訪ねるからとしてこれを謝絶した。だが吉野は、実際にはその当日、すでにヴェストファーレン(プロイセン王国)のシユヴェルム(友人ハーネの実家)を離れて、バイエルン王国のリーデンハイム(ナツプ婆宅の女中グレッタ・コルムシユテッターの実家)に移っており、参加を断るために方便を使った可能性もある。いずれにしてもこの招待を巡る遣り取りが、吉野のイエリネックとの最後の交流となった。吉野がまだバイエルンにいた一九一一年一月二日、イエリネックが授業中に急死してしまったのである。吉野は一月四日に新聞でこの悲報に接したが、日記に弔問に関する記述は全くない。ちなみに吉野は、イエリネックの死去を知る以前に下宿先の大家に退去を通告しており、イエリネックが存命でもハイデルベルクを去る予定だったようである(172)。

目当てのイエリネックに対してすらこの淡泊さであるから、他の教授陣に対する吉野作造の冷淡さは推して知るべしだろう。吉野はイエリネック以外にも、ヘルマン・オンケンの講義「列強とドイツの対外政策」(一月一日145・一月二五日149)、フリッツ・フライナーの講義「現代における国家と教会」(一月七日144)、アルフレート・ヴェーバーの講義「資本主義時代の文化問題」(二月二九日150・二月六日152)、オイゲン・フォン・ヤーゲマンの講義「ビスマルクの国法学」(二月一日145・二月二五日149)、ヘルマン・レヴィイの講義「イギリスとドイツ」(二月一日145・二月二日151)に受講登録をしているが、日記に書かれた感想はいずれも論評なしか門前払いで、出席した形跡もみな二回ほどで早々に途絶えている。曰く「併し大體に於て大學の講義は頗るツマラヌものである。兼て大學の講義はツマラヌものといふことは聞いて居たが、斯れ程とは思はなかつた。最も内

容に富むと云はる、エリネック先生のですら、馬鹿々々しくて聞いて居れぬ。是れ學生の智識の程度が低い爲めで致方もない。併し簡單ではあるが、講義の仕振りは一般に中々旨いものだ。日本の大學では、研究の成果を精一杯に講義すると云ふ風が盛で、頗る高尚深遠な立派な講義である代り、無味乾燥に過ぎて學生の頭に這入り難いと云ふ弊があるが、獨乙の先生は極く内輪にたやすくかみ砕いて講義するから、何となく趣味があつて面白く聞かれる。中には下らない所に力こぶを入れて、イヤに人氣取りをやる先生もある。」(「滯德日記」280) このように日本の「高尚深遠」な講義を聞いてきた吉野は、ハイデルベルクでの講義を完全に見下しており、唯一認めるのは話術の巧みさだけで、これもまたときとして下品な「人氣取り」と見たのだった。なお吉野には講義以外の授業、つまり演習には出た形跡がない。吉野はドイツ人とも親密に交流したが、彼らはみな市井の一般人あるいは一般學生で、密接に交流した學者は佐々木惣一、牧野英一、中田薫など非ドイツ人(在留邦人)ばかりであつた。

吉野作造のハイデルベルク大学に対する冷淡な態度は、後世から見ると意外の感がある。ドイツ帝国のハイデルベルク大学は、所謂「ハイデルベルクのミュトス」の時期にあり、囑託教授のマックス・ヴェーバーを含め、多くの世界的學者が教鞭を執り、ロシアやアメリカなどからも留學生を集めていた。そのことは他ならぬ吉野自身が、『新人』に誇らしげに書いている。「凡そ獨逸の學術の發達に關係ある碩學鴻儒にして、當大學と關係のない者は甚だ少いと云つてよい。」(「滯德日記」277) イェリネックはユダヤ系で改宗プロテスタントの自由主義知識人で、自由の發展におけるアメリカ・プロテスタントイイズムの役割を強調してマックス・ヴェーバーに示唆を与え、ヴェーバーとともにハイデルベルクでアメリカ人研究者との交流を進めようとしていた人物であるから、吉野の問題関心とも大いに共鳴するところがあつたはずであるが、そうならなかつたのは注目すべきことである。マックス・ヴェーバーやエルンスト・トレルチェなどは、吉野作造とまさに重なる領域の研究者と思われるが、吉野の日記には名前すら出てこない(但し「文化プロテスタントイイズム」の指導的學者アドルフ・フォン・ハルナックには辛うじて言及がある(「滯德日記」286))。ハイデルベルクで学んだ外国人留學生のなにも、小野塚『政治學大綱』が文献一覧に挙げたイギリス人ブライス、ロシ

ヤ人（ウクライナ人）キスチャコーフスキイのように、ドイツでも日本でも学問的に注目された人物が少なからずいる。だがそうしたハイデルベルク大学に、吉野作造は魅力を感じなかったのである。

吉野作造がハイデルベルク大学に興味を懐かなかつた理由については幾つか推測されうるが、第一に彼が授業選択を誤った可能性がある。言うまでもなくこれら大学の講義は、本来二十歳前後の若いドイツ人学生を想定したものであり、三十代半ばの帝大助教授のためのものではない。明治日本の秀才吉野作造には、あるいはそれらが本当に物足りなく思われる面があつたのかもしれない。有職者として在外研究をするのであれば、演習に出て同じ指導教官の高弟たちと切磋琢磨し、自分もそこで研究者として持論を展開するべきだったのであり、そうしてこそドイツの大学の真価を味わうことができたはずなのだが、吉野は講義にしか出席せず、そこで飽き飽きして大学を去ってしまったのである。

ただ吉野のハイデルベルク大学における授業評価には、いずれにしても不可思議な面がある。例えばマックス・ヴェーバーのハイデルベルク時代の講義は、今日『マックス・ヴェーバー全集』でその概要を知ることができるが、到着したばかりの明治の日本人留学生に、それらを論外と切り捨てるだけの実力が本当にあつたとは、俄かには信じ難い。また吉野が聞いたイエリネック、オンケン、A・ヴェーバーらの講義が、M・ヴェーバーのものとは全く別水準の、軽佻浮薄なものだったとも考えにくい。そうした講義が「馬鹿々々」しく見えるほど、「日本の大學」の講義（その一例を我々は小野塚喜平次『政治學大綱』に見ることができるが）が「高尚深遠」だったと言う吉野の説明は、一体どの程度説得力を持ちうるのだろうか。

第二の理由は、吉野作造のドイツ語能力の不足である。吉野が小気味よくハイデルベルク大学の講義を切り捨てる際に特徴的なのは、具体的な論旨を問題視するのではなく、つまらない、浅薄だ、馬鹿馬鹿しいという総花的な批判を繰り返していることである。吉野はハイデルベルク期の日記のなかで、ドイツ語に關してうまくいったと記している場合と（117など）、苦勞したと書いている場合とがあり（117・131など）、懸命に努力はしているものの、なお講義を十分理解するにはドイツ語能力が不足していた可能性がある。吉野が、辛抱強く聴講する以前に、語学力不足から

くる苛立ちから、刹那的な嫌悪感に身を委ね、「食はず嫌い」に陥ったということはなかっただろうか。

ただ吉野作造本人は、こうした疑惑を強く否定する。「大體から云ふと、獨乙人は未だ十分に日本を解して居らぬ。我々が自分で思つてゐる程に日本人を買つて呉れぬのみか、實際日本があるよりも以上に價值をつけてゐる。殊に言葉が十分に出来ぬ結果として、我々は往々何も知らぬ者として取扱はれる。僕が或時九冊もの、大部な歴史の本を買はうとしたら、宿の息子の大學生は夫は六かしいから之を讀めて、自分が中學で讀んだ薄ッぺらな歴史教科書を貸して呉れた。又或時大學の講義がありツマラナイので毎日の出校をやめ様としたら、宿の主婦は講義は六かしくて御分りにならないから？と問はれた。」〔滯德日記〕 388）吉野は語学力不足を認めるものの、飽くまで自分がハイデルベルク大学を見切つたのであつて、自分が落ちこぼれたわけではないと主張しているのである。

第三の理由は、吉野作造が留学先で西洋人に野蠻人扱いされて自尊心が傷付き、劣等感に苛まれて周囲に背を向けたという点である。これについては、吉野自身に熱く思いを語つてもらおう。「日本には電車はあるかの、汽車があるかの、飛んでもない見縊つた質問をするもの案外に多い。何もかも獨逸に學ぶを要するとも思つてるのか、或る時小學校の教師が、日本に雇はれて行き度いと人を介して熱心に申し込んで來た。支那とは固より、暹羅とも同一に取扱はれ、時によるとネグロと大差なきものに見做される場合もある。日本が東洋諸國中特別の地位を占め、特別の發達をなして居るといふ事は、餘程の識者でなければ分らぬ。故に吾々は普通の獨乙人と會話して時々此程の不愉快の感を催すことがある。ソコで其反動に、故ちに日本を過賞して、何も獨乙に劣りはせぬと云つて見たくなる。日本は昔から文明の國で、二千五百年來道德の國であるの、昔から手紙も書けぬやうな無教育者は極下層の間にもなかつたの、文學美術の方面も非常に發達したのと云つて驚かしてやる。又一步進めて、二三十年前までは西洋に學んだけれども、今は西洋と同じ程度に發達して、何も君等に學ぶ必要はないとか、僕等の留學は、一つには君等の國の本が達者に讀める様に言葉の練習をするためと、も一つには實地を見聞するために來て居るに過ぎないとか、其證據に日本の大學では殆んど外國人を教師に雇はない、東京で數人雇つてあるけれども、之は只生徒に外國語學を忘れしめぬ爲めで重きを置かれてないと

か、日本人教師の講義が立派だから、外國人教師の講義は生徒から淺薄として輕蔑されているとか、威張つて見る。場合に依つては、外國でも近頃我國學術の進歩に氣付き我國に留學生を派してゐる所もある。追々は日本語を學ぶといふことが世界の學者の新なる任務となるであらうなど、少々嘘も云つて見る氣になる。實際は矢張り西洋の方は偉いで、到底日本などが自慢されたものではないが、併し此方に来て居て、言葉の不自由や何かの爲めに、思ふ通りに事が運ばぬと、斯んな事が言つて見たくなるのである。」(「滯德日記」388—389) この文章を踏まえて考えると、吉野の勇ましいハイデルベルク大学批判も、劣等感の裏返しとの表現と見るべきかもしれない。

ところが吉野作造は、同胞がドイツあるいは西洋を見下す姿勢を見せたときには、これに強く抗議している。「新人」に掲載された談話のなかで、中島力造が「西洋にも案外大した人物大した學者は居ぬ」、「日本の學界は決して歐米に劣らない」と喝破したとき、吉野はこれを「到底許せない」として氣色ばんだ。「日本は未だ斯く迄自惚るゝの資格が無い。又かくまで慢すべき場合でも無い。左らでだに慢心の徴候顯著なる近時の我國に於て、有力なる學者が、右の如き言を吐いて慢心を長ぜしむるは、決して我國の幸福でないと云ふことに一致した。」(「滯德日記」389) それでは吉野は、かつて自分がハイデルベルク大学の講義を酷評したことをどう考えているのだろうか。西洋を、ドイツを侮るなどという吉野の警告は、実は自分自身に向けられた自己内対話にもなつていたと見るべきだろう。

結局ハイデルベルクは、吉野作造が文字通りの「留学」を試みた唯一の地となつた。ハイデルベルクをあとにした吉野は、一九一一年の夏学期はバイエルンを漫遊し、この間に東京の文部省にヴァインへの「転学」許可を申請した。この許可は、六月四日にヴェルツブルク滞在中の吉野のもとに届いている(208)。ミュンヘンからザルツブルク、ザルツカンマーグートを経由してヴァインへ到着したのは、六月二三日である(216)。ところが吉野は、ヴァイン大学での冬学期が始まる一〇月にはすでにヴァインを離れ、ブラハ、ドレスデンを観光してベルリンに入つてしまう。結局ヴァイン大学には登録しなかつた吉野には、それに苦情を述べる機会すらなく、文部省のヴァイン「転学」許可は無意味となつたのである。一九二二年一月三十一日、ベルリンで吉野は、ベルリン大学に登録しないまま、大学の講義も視

かずに、(どこ)かの時点ですでに申請していた) フランスへの「転学」を許可する文部省の辞令を受け取った(269)。フランスへ向かう途中、吉野は同年五月三日にシュトラスブルク大学を訪ね、私講師ローズホーフの講義、そして正教授パウル・ラーバントの講義を覗いているが(294・295)、これは一回限りの見物で、同大学には深入りしなかった模様である。六月一九日、ナンシーで吉野は、今度はジュネーヴへの転学願を文部省に願ひ出ている(305)。ジュネーヴ大学では夏期講習会に通い、神学部教授による「近世哲学並びに神学思潮」、「一六世紀における對抗宗教改革」、「一九世紀におけるフランス・カトリシズムの発展」といった講義を聴いている(331)。一九二二年一月二六日、吉野はパリで文部省からアメリカへの転学費用を受け取ったが(340)、何故かアメリカには直行せず、ベルギー、ルクセンブルク、ドイツ、イギリスを経て漸くアメリカに着き、僅か十二日間の滞在のち帰国の途に就いた。ちなみにジュネーヴ滞在中の吉野は、アイルランド出身の英語教師イートン嬢が、アイルランド自治法が内乱をもたらすと憤激するのを聞いて、文部省にアイルランド行きを追加費用を無心したが、流石に今度は却下されて「焼糞」になっていた(333・397)。

大学での勉学の代わりに吉野作造が試みたのは、ヨーロッパ諸国の現代政治の探求であった。吉野の日記には、大学への足が遠退き始めた一九一〇年一月末ころから、「現代政治ノ研究」という記述が登場するようになる。ただどのような研究を、どのような手段で行ったのかは、明確にされていない。

ちなみに帰国直後の吉野作造は、『國家學會雜誌』に「ブラウンシュワイヒ公位繼承問題」という論文を発表している<sup>31</sup>。これは吉野が留学前の輸入学問を脱却し、自分でドイツ政治を分析した第一歩として注目されるが、『東京朝日新聞』を情報源にブラウンシュヴァイク公国相続問題を略述したものであり、ドイツ滞在中にこの問題に興味を深めた形跡もないので、ドイツ留学の直接の成果として挙げることは不適當だろう。

「現代政治ノ研究」と並んで、吉野作造は西洋語の習得に熱心に取り組むようになっていく。吉野の語学稽古は、当初はドイツ語が中心だったが、のちにフランス語、イタリア語に重心が移行し、最後に英語にも取り組んでいる。吉野

はまずハイデルベルクで、友人の野地菊司（ハイデルベルク大学留学中の二本松の医師）と共にリーザ・フォン・ピットー二嬢につき、毎日のようにドイツ語会話を教わった。このほかヴィーンのエツシング嬢、ウルバン嬢、ブレッツサン（イタリア語）（222・227）、ベルリンのイレ夫人、ロシエ（フランス語）（254・255）、ヴェルツブルクのビジョ、クラッツァー（フランス語）（289・290・291―292）、シユトラスブルクのダルヴァン、ゲオルク・マルティン、サルトフスキー・ヴィレナン夫人、ルノー夫人、プロシウス嬢（フランス語）（295・296）、ナンシーのマリトウス、ヘル（フランス語・ドイツ語）（304）という具合に、吉野は数多くの語学教師に各地でついで稽古をしている。その後ナンシーに赴いたのは、フランス語の稽古に良いと聞いたからだだったが（297）、ナンシー大学で外国人向けフランス語講座に入ろうとしたところ、フランス語力が未熟すぎるとして断られ（302）、代わりにベルリッツ語学学校で学ぶことになる（303）。なお吉野は、パリのシヨバン嬢、アルカンポー（フランス語）（319）、ジュネーヴのイトトン嬢（英語）（333）、再び戻ったパリでジョシー・ラビッチ嬢（英語）（337）、ジモーネ・バルビール（ドイツ語）（341）にも稽古を申し込んでいる。

## 注

<sup>1</sup> 三谷太郎『新版大正デモクラシー論——吉野作造の時代』（東京大学出版会、平成七年）、一二六頁。

<sup>2</sup> この分野は『吉野作造選集』（岩波書店）の刊行によって、研究の基盤が築かれた。飯田泰三による日記や著作目録の編集作業は、重要な先駆的貢献となった（飯田泰三「吉野作造の留学時代」、『吉野作造選集13』、四二六―四三六頁）。これを踏まえて、丹念に事実の整理をしたのが、吉野作造記念館で十二年間主任研究員を務めた田澤晴子である（田澤晴子「郷里意識からの脱却——「吉野作造日記」中国天津時代からヨーロッパ留学時代についての検討——」、『吉野作造記念館研究紀要』創刊号（平成一六年三月）、二四―四一頁。田澤晴子「吉野作造の足跡を訪ねる——ハイデルベルク・ウィーンを中心に——」、『吉野作造記念館研究紀要』第二号（平成一七年三月）、二六―三六頁。田澤晴子「吉野作造——人生に逆境はない』（ミネルヴァ書房、平成一八年）、八五―一〇一頁）。本研究は、飯田や田澤の日常的・人物論的な研究成果を踏まえて、より精密に事実を整理し、



政治史・政治学史の文脈に根差して、吉野の欧米体験に迫ろうというものである。

「留學三年にあまる幾多の見聞が後年の私の立場の確立に至大の關係あるは勿論だが、中に就き特に茲に語つておきたいのは、（一）英國に於て親しく上院權限縮小問題の成行を見たこと、（二）埃都維納に於て生活必需品暴騰に激して起つた労働黨の一大示威運動の行列に加はり、その秩序整然一絲みだれざるを見て、之でこそ國民大衆の信頼を得るに足るなれと大に感服したること、（三）一九二二年の白耳義の大同盟罷業を準備時代から目のあたり見聞し、秩序ある民衆運動の如何に正しく且力あるものなるかを痛感せしこと等である。〔…〕猶右の外私は佛蘭西に於て屢々サンチカリストのストライキをも見た。」（吉野作造「民本主義鼓吹時代の回顧」、同「閑談の閑談」（昭和八年、書物展望社）、二二―二二頁）驚くべきことに、ここではヴィーンでの体験が二番目に挙げられているだけで、それ以外にはドイツ語圏（とりわけドイツ帝国）に関するものが一つも紹介されておらず、ごく短期間しか滞在していなかったベルギーやイギリスのことが強調されているのである。

4 吉野作造「民本主義鼓吹時代の回顧」、同「閑談の閑談」（昭和八年、書物展望社）、二〇四―二〇五頁。

5 東京大学百年史法学部編集委員会「東京大学法学部百年史稿（三）」、『國家學會雜誌』第九二卷第三・四号（昭和五四年）、三〇〇頁、三〇一頁。同「東京大学法学部百年史稿（四）」、『國家學會雜誌』第九二卷第五・六号（昭和五四年）、四四三頁。同「東京大学法学部百年史稿（五）」、『國家學會雜誌』第九二卷第一・二二号（昭和五四年）、八五一頁。

6 東京大学百年史法学部編集委員会「東京大学法学部百年史稿（二）」、『國家學會雜誌』第九一卷第一・二二号（昭和五三年）、八〇二頁。

7 木場貞長「教育行政 全」（金港堂、明治三五年）。木場貞長『財政學講義』（發行所・發行年不明）。

8 福田欲一「小野塚喜平次」、『國史大辭典2』（昭和五五年、吉川弘文館）、八九〇頁。

9 Akademische Quästurliste von Max Weber, in: Universitätsarchiv Heidelberg, Rep. 27/1409.

10 小野塚喜平次『政治學大綱』（博文館、明治三六年）。但し今回は第五版（明治四四年）を参照した。

11 Studien- und Sitzzeugniß von Kihieji Onozuka, in: Universitätsarchiv Heidelberg.

12 長尾龍一「穂積陳重」、『國史大辭典1・2』（平成三年、吉川弘文館）、七七〇頁。

13 吉野作造「穂積老先生の思ひ出」、同「閑談の閑談」、二六六―二六八頁。なお吉野作造「ヘーゲルの法律哲学の基礎」には、（法理学演習の？）「指導教授穂積陳重先生」という表現がある（『吉野作造選集1』（岩波書店、平成七年）、一九頁）。

- 14 福島正夫「梅謙次郎」、『國史大辭典2』(昭和五五年、吉川弘文館)、一六三頁。
- 15 吉野作造「民本主義鼓吹時代の回顧」、同「閑談の閑談」、二〇六一—二〇七頁。
- 16 吉野作造「ヘーゲルの法律哲学の基礎」、同「吉野作造選集1」(岩波書店、平成七年)、一九一—七七頁。
- 17 吉野作造「農業保護政策ト獨逸労働者」、『國家學會雜誌』第二〇卷第一号(明治三九年)、一〇三—一四頁。
- 18 Alfred H. Fried, *Die moderne Friedensbewegung*, Leipzig 1907.
- 19 Hans Wehberg, Alfred H. Fried, in: *Neue Deutsche Biographie*, Bd. 5, Berlin-West 1961, S. 441 f.
- 20 吉野作造「支那人の形式主義(再び)」、『新人』第七卷第七号(明治三九年)、一四頁。
- 21 吉野作造「支那人の形式主義(再び)」、一八頁。
- 22 『古川餘影』(昭和八年・平成七年吉野作造記念館復刻)、二頁。
- 23 『吉野作造選集1』<sup>3</sup>、八二頁。田澤晴子「吉野作造」、七八頁。
- 24 北岡伸一「後藤新平——外交とウィジョン」(第三版)(中央公論新社、平成二二年)、三、二〇—二五、三五、七五、一一九頁。
- 25 田澤晴子「吉野作造」、七九頁。
- 26 Dietrich Stoltzenberg, Fritz Haber. Chemiker. Nobelpreisträger. Deutscher. Jude. Eine Biographie. Weinheim 1994, S. 540 f.; Margit Szöllösi-Janze, Fritz Haber. 1868-1934. Eine Biographie. München 1994, S. 563-567.
- 27 美濃部達吉「エリネック」教授ノ國體論』『國家學會雜誌』第三卷第一〇号(明治四二年)、一四一—一四四八頁、第三卷第一号(明治四二年)、一八〇—一八四四頁。なおこれは、イェリネック『一般國家学』の抄訳である。
- 28 Brief von Shinkichi Uyesugi an Georg Jellinek, Tokio 23. Juli 1909, in: BArch [Bundesarchiv Koblenz] N 1136/30; Brief von Shinkichi Uyesugi an Camilla Jellinek, Tokio 2. März 1911, in: Ebenda. 中田薫「上杉君を想ふ」、『七生社編『上杉先生を想ふ』(七生社、昭和五年)、三八—四一頁。「故上杉先生略歴」、『上杉先生を想ふ』、五頁。
- 29 Max Weber-Gesamtausgabe III/1, Allgemeine ("theoretische") Nationalökonomie. Vorlesungen 1894-1898, Tübingen 2009; Max Weber-Gesamtausgabe III/5, Agrarrecht, Agrargeschichte, Agrarpolitik. Vorlesungen 1894-1899, Tübingen 2008.
- 30 中島力造「外遊所感」、『新人』第一卷第八号(明治四三年)、五三六—五三九頁。中島は、二十年ぶりに洋行で欧米世界の精神的衰退を実感したとし、かつてのカーライル、カント、フィヒテ、ヘーゲル、ベルグソンに匹敵する人物がもはや欧米にはい

ないと嘆いている。これに対し中島は、日本、とりわけ「吾國の法文科大學」には「世界的の學者人物」が揃っており、これが世界で認知されていないのは外国語に翻訳されていないからだと言語した。中島は更に、学問以外でも日本の人材は世界に勝るとも劣るものではないとし、東郷平八郎、乃木希典らを「世界的のゼネラル」と称揚している。中島の発言は、吉野のドイツ評と同じく、日露戦争直後の日本人の自信高揚を示すものであると言えよう。

吉野作造「ブラウンシュワイヒ公位繼承問題」、『國家學會雜誌』第二十七号第一一号（大正二年）、一六〇—一六一二頁、第二十七号第二二号（大正二年）、一七九—一八二二頁。